ジェンダー、エスニシティ、「聖なる権威」への抵抗：
在日大韓基督教会女性牧師・長老按手プロセスにおける「民族」の位置

李　　恩　子

本稿は2011年9月、日本宗教学会、宗教とジェンダー部会で発表した原稿に加筆修正したものである。

はじめに

宗教が個人の救いのために存在するという前提は広く受け入れられるであろう。だが、では、救いとは何かという問いに対する答えは様々である。以前、アメリカの神学校時代に韓国から民衆神学者安炳茂が客員教授としてやってきた。新約聖書学者である安教授がクラスで力説したコメントがある。それは、解放（liberation）とは soteriology における救い（salvation）よりも広い意味があり、ある種salvationのcounter notion とも言うべき概念であるという内容のものであった[1]。それ以来、筆者にとって、宗教は人間解放にとってどのような働きができるのかという問いと関心を持ち続けてきた。またそもそも解放とはどういうことなのかということを考え続けてきた。魂の救いという次元にとどまらず、一人の人間が抑圧されている様々な状況から解放されるためには宗教ないし、宗教団体はその構成員に更には社会にどのような影響を与えてきたのであろうか？一方、多くの宗教団体は「救い」という名のもとで女性たちを抑圧し、従属させてきた現実とどう向き合ってきたのであろうか？

本稿では宗教法人在日大韓基督教会（Korean Christian Church in Japan以下

1　カルフォルニア太平洋神学校大学院1989年fall semester新約聖書学のクラスにて。

KCCJと記す)、というキリスト教団を取り上げエスニシティとジェンダーの交差する視点から教団の問題点を浮き彫りにし、その中で見えてくる民族・エスニシティの位置を検証する。検証する教団は、これまで筆者が一教会員として両親の生前からともに関わってきたところである。ただし、その間の数十年は米国に留学・居住に伴い地理的にも心理的にも教団を外から見る位置にいた。したがって本稿は、インサイダーだけでなく一定の距離を保ちながらアウトサイダーとして教団を見てきた経験と立ち位置から書かれたものである。

検証する基本的問いは1）女性信徒たちのジェンダー意識はどのように培われてきたのか。2)「民族解放」運動は「女性解放」につながるのか、つながらないのかなどである。具体的な方法としては、教団内における女性牧師・長老の按手が認められるプロセスにおける女性たちの働きとその当時の社会運動そして、女性たちの声を読み取ることができる機関誌をもとに分析する。

KCCJの略史とその特性

本論の中心議論である教団内での女性たちの位置と働き、そして彼女たちにとって「民族」という変数がどういう意味をもつのかということを紹介する前に、まずKCCJの歴史を日本社会との関係から素描したい。

KCCJは在日朝鮮人社会で唯一、戦前に設立されたキリスト教団体である[2]。宗教団体であるということやその数そのものが少ないということ等もあって一般の日本人コミュニティはもちろん、在日朝鮮人コミュニティですらその存在はあまり広く認知されていない。しかし、その歴史は決して短いものではなくその存在意義は教団の歴史を辿っていくと確認することができる。

一昨年2010年は「日韓併合」100年を迎えた年であり歴史的な節目とあって様々

2　「在日朝鮮人」という表記は朝鮮半島の南北の国家のどちらを支持するのかというイデオロギー的な意味合いを含むものではない。むしろ、日本人社会で造語となった、在日韓国・朝鮮人という中黒入りに意義を申し立てるという立場、朝鮮半島の分断以前から移動して来た人々によって形成されたコミュニティであるということを強調するためのものである。ただし、本文中では在日や在日一世・二世という表記も使う。

なところで、「日韓併合」に関連する行事や言説活動が多く見られたがKCCJの歴史はその「日韓併合」に先立つ二年前に始まっている。朝鮮が日本の植民地になる数年前の1906年に東京に来ていた留学生を中心に東京朝鮮基督教青年会（現、在日本韓国YMCA）が設立され、その留学生たちが二年後に立ち上げた東京教会がその発端である。そして、2008年10月には宣教100周年の記念式典を持ち現在に至っている。

植民地朝鮮における日本帝国主義の不条理な植民地政策の激化に伴い1920年代30年代に日本に移動してくる人々が増えていった。そして、人々は互いを支え合い協働して各地に教会を建て始めた[3]。一言でいうと彼・彼女たちの歴史は民族の苦難の歴史に翻弄されながらも「祖国」の歴史に寄り沿い歩んで来たと言えるだろう。戦前は日本の植民地下における自主独立のための闘い、戦後は朝鮮半島の平和的統一のための働きや在日朝鮮人の人権問題と民族差別問題など、その置かれている抑圧状況に敏感に対応し、少なくとも応答しようという動きが70年代、80年代にはかなり見受けられた。

戦前は在日本朝鮮基督教会として、そして戦時期の国家神道体制下においては日本の様々な教派とともに日本基督教団として吸収合併されていった。戦後、日本基督教団から脱退、独立し1948年に、在日大韓基督教会総会と名称を変更する。名称変更とともに、組織教会としての連合体を構成し、そのもとに各地方の個教会が集められ一つの教団として現在に至っている[4]。現在KCCJのローカルチャーチとして99の個教会が日本全国に散在している[5]。

KCCJはその教団の特質を1）エキュメニカル性、2）マイノリティ性3）ダイバーシティ（多様性）と規定し、それを宣教課題の根幹とみなしている。エキュ

3　戦前は60近い教会が建てられたが朝鮮の解放と共に多くの人々が帰国し、戦後は10数か所の教会が再建された。

4　教団の詳しい歴史の記述として、李清一、「感謝の百年・希望の百年：在日大韓基督教会の歩みと展望」に詳しい。在日大韓基督教会編、宣教１００周年記念合同修養会のハンド・ブック、2008年、更に戦前の女性伝道師に関する貴重な資料に、呉寿恵、「在日朝鮮基督教会の女性史研究」、同志社大学大学院神学研究科博士論文、2009年、がある。

5　この数はKCCJに属している韓国教会の数であって、90年代以降ここに属さない韓国教会が雨後のタケノコのように増え続けている。

メニカル性とは歴史的に韓国の二つの教派（長老派とメソディスト）の人々によって始められたことや世界キリスト教協議会（WCC）日本キリスト協議会（NCCJ）、韓国キリスト教協議会（NCCK）など超教派的な教会組織や韓国の教派の違う多様な教団と宣教協約を結んでいることなどが上げられる。次にマイノリティ性であるが、マイノリティといってもその定義は様々であるが、ここではエスニックマイノリティのことであり、単に数の問題としてではなく権力関係において支配される側という意味のことである。3点目の多様性とは教団内の構成メンバーにおける背景（出自）のダイバーシティ性のことである。つまり、日韓間の国際結婚によるいわゆる「ダブル」の背景を持つ人々、80年代以降に増え続けている韓国からのいわゆるニューカマー（新一世）や戦前からの一世世代から戦後生まれの4世世代まで、世代的背景の違いなど、「在日」といっても一括りにできない様々な背景を持つ人々が構成メンバーであるという実情を多様性と規定している。本国生まれか日本生まれか、両親のいずれか一人が日本人であるかどうかなどの背景の多様性は「在日」としてのアイデンティティや差別の経験、そしてそのトラウマの解釈と考え方、ひいては信仰理解においてもその様相は多様である。

三つの特質が言説化され強調されてきたのはこの40年ほどである[6]。とりわけ、マイノリティ性に関しては教団の自己規定として対内外的に強調してきた。そして、マイノリティ性を規定する核となる概念は「民族」である[7]。しかも、この概念は個別的特殊性として位置づけられながら、一方で「信仰」あるいは「信仰共同体」という普遍的価値と時には拮抗し、時には合体してその特異な教団形成をなしてきた。「民族」を核とする信仰共同体という特性は、とりわけ冒頭で言及した1970年代、教団総体として人権の問題、つまり、民族差別撤廃運動

6　この特性は1968年に宣教60周年を迎え「キリストに従ってこの世へ」という標語のもと強調されていく。また、1973年に出された宣教基本政策や1989年80周年の宣教理念にも打ち出されている。

7　筆者はこの「民族」という名詞を同化と排外を強要されてきた被抑圧者としての経験、国際政治の利害に翻弄されてきた朝鮮半島の歴史的経験と抑圧に抵抗してきた経験という動詞的意味として定義したい。

などに積極的に取り組ませていった。そして、後述する女性たちの著述にもみられるのだが、構成メンバーの問題意識あるいは存在根拠の根幹の一つになっているといっても過言ではないだろう。

教団内の少数派ではあるが70年代から90年代にかけて指導的役割を担っていた一部牧師、信徒たちを除き信仰的には極めて保守的な信仰理解の者が多数占める教団がどうして人権問題等の社会運動に積極的に参加できたのであろうか。イエス運動を解放運動としてその教えが人間の救いに繋がるという解釈をし、理解する人々は極めて限られた層である。にもかかわらず、民族の解放というメッセージは旧約の出エジプトの出来事と重ねて語り続けられている[8]。このような側面から見るならばKCCJは「民族教会」という他者規定に応答するような特性と存在意義を意識的にも無意識にも自己認識してきたといえるかもしれない[9]。

自己認識であれ、他者規定であれ、「民族解放」あるいは、在日朝鮮人としての人権に関する大義に対しては政教分離の原則を掲げて、社会運動や政治運動に関わるべきでないとする牧師たちにとっても民族解放運動に参加することは矛盾しないことなのである。しかし、残念ながら男性聖職者をはじめ教団指導

8　教団最初の神学体系と称される李仁夏、『寄留の民の叫び』、新教出版、1976参照。

9　大阪大学博士課程にいた崔恩珠はKCCJを「民族教会」と規定して発表していた。2009年9月22日社会福祉法人シャローム「セットンの家」主催フォーラムにて、参加者ほとんどが在日二世女性だったがその規定に彼女たちから強烈な反発を受けた。その反発は極めて感情的なものであったが現在のKCCJの個教会の現状の一端を如実に表していると言える。それは、80年代後半以降に増加し続けてきた、韓国からのいわゆる「新一世」たちとの葛藤である。韓国語を解せない二世以降にとって、「新一世」たちの言語力とあらゆる面で精力的な彼・彼女たちの存在は脅威にちかい緊張関係を生じさせてきたからである。また、「民族」を経験するということと、外から規定されるということは違うという証左であったとも取れる。このような感情的な反応を経験し、当時の発表を含み2011年度に博士論文として書き上げたが崔は一貫してKCCJを「民族教会」と規定して論じている。この規定は一つの方法論といえるかもしれないが、その「民族教会」の定義によって本文で紹介してきたように、教団員の「民族」に対する理解、アイデンティティそして、経験の実態から逸脱する可能性があるだろう。筆者個人としてはKCCJを「民族教会」という用語や概念でもって規定する場合の明らかな前提や定義がなされていないことに不満と同時に違和感をもつ。ただ、崔の論文はジェンダー視点で書かれた数少ないKCCJについての論文として貴重な研究の一つといえるだろう。論文のタイトルは「民族教会と女性、そして愛をめぐって―在日大韓教会に対するジェンダー論的な“読み”を試みる―」、大阪大学大学院文学研究科,2011年。

者の「民族解放」や人権回復のための問題意識は決して女性解放とつなげて捉えられることなく今日に至っていると言えるだろう。

教団内の70%が女性信徒であるにもかかわらず、女性の位置、役割は旧態依然といわずにおられない実情が多々ある。だがそんな中にあっても歴史の進歩と言える事柄が起こるものである。

女性たちの意識と声が高揚するきっかけとなったイッシューがある。それは、1978年にKCCJの教団憲法が改正されるまでに至った女性長老・女性牧師将立に関してのことである。以下教団内の女性の位置を女性牧師・女性長老按手問題のプロセスを概観しそこで「民族解放」運動という大義がどのように影響したのか、そして「民族」とは彼女たちにとってどのようにアイデンティファイされてきたのかということを述べてみたい。

女性牧師按手プロセスにおける「民族」の位置

教団内での女性の存在意義は単に数の多さという次元だけでは語れない。筆者の両親が通い現在筆者も通う在日大韓基督教大阪教会は、二人の女性信徒の祈りから始まったと言われている。この二人の女性とは釜山から集団就職で大阪の紡績工場に来た金義生姉妹である。彼女たちは日本に来る前にすでにクリスチャンであり、日本に来てからも、独自に聖書を読み、祈りの時を守っていた。また、彼女たちは異国の地で出会った同胞労働者を慰め、共に祈る働きをしていた。その姉妹と当時神戸の神学校に留学中であった金ウヒョン神学生との出会いが教会設立につながったのである[10]。

大阪教会が創立された1921年という時代的背景として、当時大阪の紡績工場に多くの朝鮮人女性が「出稼ぎ」に来ていた[11]。故国を離れ、差別冷遇の中で酷使されていた人々が祖国の香りを共有できる同胞と交わることができる場として、教会が建て発展させてきたことは以下の文章からも容易に想像できる。

10　大韓基督教大阪教会編、『在日大韓基督教大阪教会55年史』、1979年、75頁。
11　当時の労働者の環境については金賛汀、『朝鮮人女工のうた』、岩波新書、1982年、参照。

大阪教会は、ふたりの韓国人女性の祈りによって生まれました。
大阪生野の地にあって、貧しく、虐げられ、弱くされた在日同胞の心の拠り所となって、救い主イエス・キリストによる信仰の灯火を高く掲げてまいりました。中略。より豊かにと励んできた今日の日本社会に、充たされない心の渇き、傷ついた魂をかかえ、苦しい人々のいかに多いことでしょう。国と民族のちがいをこえて、共にイエス・キリストの御言葉に聴き、賛美と礼拝をささげましょう。きっとあなたの傍らに主がおられます[12]。

大阪教会のホームページに書かれているこの文章は創立当時から今日に至って「民族」という特殊性は宣教の中心課題としてあったと読むことができる。一方でその特殊性の限界をいとも簡単に乗り越えられるかのように普遍性としての「信仰」に依拠して国と民族の違いを乗り越えようと呼びかけている。民族という境界は乗り越えられると前提し、乗り越えられなければならないとする。だが、創始者である二人の女性について言及しながらも、ジェンダーの境界、女性の苦しみや抱えている問題への問いは不在である。この不在性は今日においても、女性の主要役割の一つである「台所での奉仕」を再生産させ続けているのである。そのような教団内の文化風土の中であっても女性たちの意識は変わりつつあった。その大きなきっかけが女性牧師・長老按手を受けるための資格規定の問題である。

二年に一度開かれる在日大韓基督教会総会において幾度となく建議に上がった女性牧師、長老の按手問題は1978年の総会においてやっと認められ、ついに教団憲法を改正させるまでに至った[13]。画期的なことではあるが、女性たちが早くからそのことに対する問題意識をもっていたにもかかわらず、彼女たちの能力が認められるに至った時期としては遅すぎると言えるかもしれない。言い換えるならば、男性指導者たちの反対、抑圧がいかに強かったという事を示して

12　http://www.osakachurch.or.jp/ja/
13　興味深いことに、戦後最初に作られた1948年版の教団憲法には女性が「聖職者」になる規定の文言はなく、1954年に改正された憲法に牧師試験を受ける資格は27歳以上の既婚男性と明記される。在日大韓基督教会憲法18条牧師視務の項参照。そして、1978年の改正でその文言が外される。

いる。

女性たちの能力、先見の目は現在すでに開所している高齢者のためのケアハウス「セットンの家」を建築するという問題意識に見ることができる[14]。

1956年に教団内の女性連合体によってすでに在日一世たちがキムチを食べ、「母国語」を自由に喋れる環境の老人ホーム建設決議がいち早く採択されている。女性たちの社会への貢献を見据える意識と比較しても教団の男性指導者たちの女性に対する態度、ジェンダー意識などは低いと言わざるを得ない。

遅すぎた採択ではあるが、本国教会の趨勢や主要宣教協約のあるカナダ長老教会で女性牧師が認められたのはわずか数年前の1975年ということを鑑みると決して遅れているとは言えないと評価する者もいる。しかし遅かれ早かれ、決議に至った背景には女性たちの粘り強い働きかけによるものであった。ではその働きを支え動機づけとなった意識と背景は何だったのだろか。

教団の内部からこのイッシューの改正劇をみると、単独の議案としては却下されており、当時の憲法内容の簡素化も含めた他のイッシューとともに採択され、一種いびつな通過のしかたであったと言われている[15]。しかし、1978年という当時の社会的風潮、つまり、前述した70年代初期からの「民族」にまつわる人権運動や70年代の韓国の民主化運動の高揚など、社会に対する意識あるいはキリスト者としての社会参与が積極的に追及されていた教団内の風潮と問題意識が改正に至った一側面ではなかっただろうか。この主張を裏付ける根拠として、ここで、1970年代の教団内外の社会状況を少し述べてみたい。

14　全国女性会が母体となり献金を集め建てたケアハウスである「セットンの家」や女性のための電話相談セットンも名称にセットンが入っているがこのセットンは韓国語で、色々な色が混ざったレインボーカラーのことで、まさに、アメリカのジェッシー・ジャクソンが立ち上げた「レインボーコーリション」と同じ意味合いが込められている。つまり、多様性を認めて合って尚一つであるということだ。

15　当時この問題を中心的に取り組み働いていた女性会二代目の総務、申英子牧師とのインタビューによれば、一種どさくさにまぎれて、通過したものだが、もちろん、そこに至るまで何度かの建議書を教団総会に提議しているということであった。申自身も神学校を出ているものの総務時代は女性牧師が認められていなかったので、日本基督教団で按手を受け、現在は日本基督教団ハンイルチャーチの担任牧師である。2011年8月3日、大阪天王寺区にあるハンイルチャーチにてインタビュウー

1970年代の在日朝鮮人社会は戦後の社会運動を考える上で緊要な時代である[16]。一世から二世への世代交代と共に、日本の文壇、論壇で在日朝鮮人の言説が流通するようになった時代である。また、70年代は苛酷な状況にも屈せず韓国の民主化闘争が高揚した時代で、日本社会でもその闘争に連帯する運動が大きく展開した時期でもある。韓国の民主化闘争への連帯運動のみならず、戦後初めて、「民族差別」が日本の法廷で問われた日立就職差別反対運動とその勝訴が広く世論で取り上げられた時代でもあった[17]。

このような在日朝鮮人を取り巻く日本社会の動向と同質のものが教団内で主流になりつつあった。たとえば、1971年に在日朝鮮人の人権とコミュニティのための会館が大阪市生野区という当時在日朝鮮人人口最大の密集地域に立てられ、1974年には韓国人問題研究所（RAIK）が東京に設立され、同年にはマイノリティ問題と宣教戦略と題する国際会議が欧米の教会代表を招いて開催され、また、黒人解放神学の主唱者であるニューヨークユニオン神学校からジェームス・コーンが招かれ、人権シンポジュームが定例化されるなど、KCCJ青年会全国協議会をも巻き込んで活発な動きがあった[18]。

教団内外の進歩的な時代背景が女性牧師・長老を認めていく運動と直接的に連動したと実証することは困難かもしれない。しかし、少なくとも男性牧師、長老たちが教団憲法改正に反対し続けることを困難にし、その排外的態度を無化する目に見えない力として「民族」に関連する社会運動の影響があったと推測できる。いずれにしろ、結果的には教団憲法改正二年後の1980年に初の女性長老が輩出され、83年に初の女性牧師が誕生した。現在女性牧師は男性86人中19人、女性長老は男性81人中12人である[19]。まだまだ、信徒数の男女比からする

16　70年代の在日朝鮮人社会運動の断層については筆者の論文を参照。李恩子、「70年代の抵抗文化—在日朝鮮人社会運動史一断章—」、『前夜』、2006年、7月

17　この闘争の連帯運動として、韓国のキリスト教女性連合会とＫＣＣＪの女性連合会は日立製品不買運動を世界教会協議会（ＷＣＣ）と協力して展開した。この例からも「民族解放」運動が個人の意識変革に与えた影響を推測するに値すると言えるだろう。

18　年表的な歴史はＫＣＣＪホームページに詳しい。http://kccj.jp/

19　ただし女性牧師19人中7名は無人所である。つまり女性を迎える教会はまれであるということである。

と低いと言わざるをえない。また、牧師や長老になることが一つの権威であるとみなす価値観がはびこっており、その価値観が女性牧師や女性長老になった後、本来的なジェンダー意識を深め、その意識をベースとする価値観の構築に弊害になっていたりもする。しかし、女性たちの働きかけで成し遂げたものとして一つの歴史的発展として評価をすべきだろう。

様々な課題をまだまだ多く抱えながらもこの一つの大きな流れを変えた出来事から明らかになったと思えることがある。教団の牧師や長老たち、とりわけ「在日」の女性牧師や女性長老は、少なくとも、自らの民族的アイデンティティの根拠とジェンダーの視点に立つことによって様々な問題が見えてくることを体得したのではと思う。またその視点に立って気づく事柄は教団の男性中心主義の矛盾と諸問題が女性の従属化に繋がっているということである。

変革主体としてのジェンダー意識のめばえ

KCCJの女性たちによる女性牧師、長老按手を成し遂げた成果はその後教団内や社会にどのような影響を及ぼしただろうか。対外的には、80年代の外国人登録法における指紋押捺拒否運動のような「民族」に関連する社会運動に関わる人々が増え、90年代に入っては日本社会でも大きな問題となった「従軍慰安婦問題」など、支援し連帯していく中で、遅々たる歩みとはいえ、ジェンダー意識は培われていった。外からの刺激による小さな意識変革であったものが自らの意識としてジェンダーの視点が根付いたと言える一つの例がある。

2000年に起こったいわゆるセクハラ事件である。関西にあるKCCJ所属の個教会牧師のセクハラが発覚し、KCCJの女性たちがその問題に関わったのである。この事件は教団内での牧師の権威を利用して押し付けられてきた諸問題の一つとして、はじめて表面化した問題である。表面化する原動力となったのは被害者の勇気ある告発と女性たちの被害者への支援、真相究明と問題解決に向けた積極的な働きであった。そのような働きがなければうやむやにされ闇の中に葬られてしまったかもしれない。

事件発覚後、女性たちは教団常任委員会へ加害者である牧師の免職要求や加害者が損害賠償の義務を不履行にするために起こした訴訟を取り下げさせるなどの取り組みを展開した。最終的に加害者である牧師を免職まで追いやったが免職に至るまでの経過は、教団男性執行部と免職か停職かとの見解の相違、事態に対する認識の違いなど紆余曲折であった。にもかかわらず、加害者を免職という結果まで導いたのは在日大韓基督教会全国女性連合会に集う女性たちの力であった[20]。その中でも中心となったメンバーは女性教職者と女性長老たちであったことからも、牧師、長老は男性だけと限定されていた時代に比べ実質的な変革勢力になったとみなすことができるだろう。この闘いは2004年9月に開設されたDVホットライン「女性のための電話相談セットン」という活動に発展し、現在もその活動が続けられている[21]。

事件の真相究明などのために発足した「性差別等問題特別委員会」は後に自然消滅したかの如くなくなった。[22] 当時その委員会の名でセクシュアル・ハラスメントについて信徒に向けた韓日両言語による教育用小冊子が発行されている。その小冊子の発刊の辞に次のような文章がある

> この小冊子は、我々の教会に切実に要求されるものでありますが、読んで多少抵抗感があるかも知れません。韓国・在日で暮らした信徒は教会で性的問題を正面から取り扱った経験が乏しく、個人の人権侵害の問題を公で明らかに

20 「在日大韓基督教会全国女性連合会」という団体名は過去三度名称変更されているが、その変化そのものからも女性意識の変化が読み取れる。在日大韓基督教女伝道会全国連合会→在日大韓基督教婦人会全国連合会→在日大韓基督教全国教会女性連合会と現在に至っている。

21　女性のための電話相談セットンに関して詳しくは設立当初から相談員として中心的に活動している崔浅子、「小さき者と共に」、聖公会生野センター機関誌ウルリム(響) 39号、2006年6月。

22　画期的とも言えるこの委員会がなぜなくなったのかということを当時の委員数人に聞いてみたが、明らかな答えはない。恐らく、具体的な事件を解決するための方策として結成された経緯から加害者の当事者追放という一応の解決を見た段階でなくなったのだろう。また、委員会の名称自体「過激」と受け止められる委員会は教団内の男性指導者たちの圧力でなくなったと推測できる。

することを教会でタブー視するふしがあったからです。このような慣習が、永い間セクシュアル・ハラスメントの被害を表面化させませんでした[23]。

ここに書かれた文章は教団の体質を如実に語りその体質にチャレンジ、変革していこうとする思いを読み取ることができる。そればかりか、多くの人々から共感してもらうためにぎりぎりのところでこれまでの教会のあり方について批判を試みている。具体的な問題にかかわるなかで、女性たちの意識は更に、教団の変革勢力になりつつあることを示すものである。在日大韓教会に限らず、キリスト教会は「性」について、非常に敏感に反応し、タブー視してきた。その原因を分析することはここでは出来ないが、韓国の儒教倫理観の文化の中で育った人々がキリスト教の性倫理観に出会い、より偏狭的で硬直したものが育っているだろうと考えられる。そういう文化的体質の中でこの文言は今後、女性たちが更なる変革勢力に育つための担保になると言えるのではないだろうか。

小冊子が出たのは2004年、初の女性長老、牧師を輩出してから20余年経った。教団内での発言権を得るためには牧師、長老というステータスは必須であるといえるかもしれない。その既得権がこのような運動を可能にし、小冊子発刊まで至ったのだろう。しかし、この小冊子が出る随分前に、そして女性牧師・長老を輩出するバックボーンとなったとも見なせる女性たちの表現の場がすでにあった。それが、機関誌『コゲ』である。以下の節でその機関誌に現れる彼女たちの考え、思い、意識から「民族」がどのように関連しているのか読み取ってみたい。その作業は本稿のテーゼである。ジェンダー意識の気づきは「民族」にまつわる経験・アイデンティティと密接につながっている事を示すためである。

ジェンダーとエスニシティ：
機関誌『コゲ・峠』に見られる「民族」の位置

23　在日大韓基督教会性差別等問題特別委員会編、「性差別とセクシュアル・ハラスメントについて」、2004年7月4日発行。

在日大韓基督教会女性たちにとって経験を通して身体化されるエスニシティ・民族という概念が彼女たちのジェンダー意識にどのように作用し影響しているのだろうか。ジェンダー意識の胚芽とも言える当時の教会女性の機関誌『コゲ』からその影響と彼女たちの問題意識そしてアイデンティティを探ってみたい。

機関誌『コゲ』は1973年に産声をあげ、2009年に13号まで発行され、定期刊行物ではないものの時には年に数度刊行されてきた[24]。近年は発刊が停止されている。他に活字としての媒体は二年ごとの大会記録や非定期に出される「女性会ニュース」などがあるが、女性たちの問題意識が反映されて生の声が聞ける全国レベルの媒体としては唯一これだけである[25]。

創刊号の「発刊の辞」にある次の文章は明らかに、「民族」にアイデンティファイしていたことが伺える。

去年の十月三－四日、第二十四回全国女伝道会連合会総会が大阪教会（KCC会館内）でひらかれ、役員改選によって新しいメンバーのもとに、テーマが「学ぼう我々の歴史」ときまりました[26]。教育局として比の主題に沿って文集を出すことを計画しました[27]。

この創刊号の発刊の辞だけではなく初期の『コゲ』には民族や人権の問題についての論考がかなり目につく。また、民族に関することは男女共通するものとしてか女性たちの声だけではなく前述した日立就職差別闘争の当時者である

24　1976年から78年にかけて、岐阜教会の李蓉子教育局長の時代に二年に3巻と一番多く発行され、民族問題だけではなく、社会問題に関連した内容が多く組み込まれている。
25　『コゲ』が発行される背景として、在日朝鮮人問題が可視化されることによって民族意識の高揚なども考えられるが、発行人である女性たち、実務者の総務、教育局の委員が在日二世世代であるということからも、日本社会で教育を受けた人々への世代交代が一つの背景として考えられる。
26　原文では日本語版においてもこのテーマの部分は韓国語で書かれているがここでは日本語の意味だけを書き記した。我々の歴史とは教団の歴史ではなく「民族」の歴史である。
27　当時教育局長であった李錦容の『コゲ』発刊にあたって、在日大韓基督教女伝道会全国連合会教育局編、『コゲ』創刊号、1973年、5頁

朴鐘碩による投稿や「民族問題を考える」というような特集が組まれた。また80年代に入ってからは一世女性の聞き書き証言集や、研修会の講演テーマに女性に関することが目立ち始めている。

理論的に整理されたものではないが、女性意識の変化が顕著に表れる短いエッセイを紹介したい。78年の女性牧師・長老按手問題における教団憲法の改正に先立つ、76年に女性長老について書いたものである。匿名ではあるが、その筆者は「最初は女性が長老になるのは反対であった。女性は従順であるべきなどという価値観を内面化し反対だったのだけれども、イエスが復活後に最初に現れたのは女性の前だという事などを学んでいくうちに、認識が変わった」というようなことを述べている[28]。

ここで特筆したいのは、『コゲ』は日韓両言語で発行されているということであり、執筆者と編集人の大半が日本語を第一言語とする在日二世女性であるということだ。この事が何を示すかと言えば、一世と違って二世は教育の機会に恵まれ、活字で自己を表現できるということもあるが、同化と差別の狭間で育った二世以降の世代にとって、民族問題と女性問題は分離して考えにくいということである。言い換えるならば、大半の二世たちはまず民族差別を経験し、その差別の経験が他の差別を見えやすい位置に置くということである。もちろん、多くの教会女性がまずは信仰の問題、そして民族の問題、最後に女性の問題が優先事項の順位になっていることも現実である。しかし、少なくとも、抑圧の原因の変数が何であれ、被抑圧の経験をした者にとって、他の変数による抑圧の矛盾には敏感になる感性がおのずと生まれていると言える。

たしかに、70年代の民族解放運動のリーダーシップは男性牧師であり、『コゲ』の投稿者の中にはその牧師夫人や娘など家族によるものも見られる。しかし、民族問題と女性問題を繋げて考えていくという主体的行動を取った人々の大半が一般信徒である女性たちであったことは否めないだろう。民族とジェンダーが交差する視点の反映ともいえるものに、一世の語りを聞き取った『コゲ』臨

28　匿名、「女性長老制度賛成」、『コゲ』第4集、1976年、8-29頁。

時号の刊行がある[29]。聞き取りの対象となったのは全員女性である。一世女性からその信仰の証として、また民族の苦難の生き証人として彼女たちのオーラルヒストリーを記述し残していくという作業をしたのも女性たちであった。彼女たちは一世世代が味わった露骨な朝鮮人差別の話を聞きながら、また、家庭内での耐え忍び難い女性ゆえの不条理な苦痛と苦労を聞くなかで、理論ではない二重、三重の抑圧を認識してきたのである。

ある時は教団を支える縁の下の力持ちとして、ある時は教団変革の闘志として、そしてある時は未来を担う次世代のため、女性たちはその働きを大切な記録として機関誌『コゲ』に表現し残してきた。その記録はジェンダーとエスニシティの視点が不可欠なものとして、語りつがれて行くであろう。

おわりに：解放運動の主体に向けて

教団内部から見れば、自己批判しなければならない問題が山積みされている。たとえば、牧師、長老というステータスが一つの権威とみなされている傾向がある。つまり、男性たちが作り上げた権威主義を内面化し女性たちの間に権力関係が生まれるということも現実に起こっている。にもかかわらず教会女性は、解放のための主体を確立し教団内外の社会運動を民族とジェンダーの交差する視点から更に発展させて行く可能性があると言える。なぜならば、良かれ悪しかれ教会女性は組織化されてきた歴史があるからだ。

マンネリ化されたプログラムではあるが日曜礼拝と違うレベルの集まりや研修会が定期的にある。教会というパイプを通して世界とのネットワークが他の民族団体よりはるかにある。なによりも毎週日曜日に定期的に集まれる意味は大きい。これらの好条件を民族解放と女性解放に繋げ更なる発展をするためにはやはり、宗教団体である以上どのような聖書解釈のメッセージを聞き、礼拝後どのようなプログラムを持つかで数の上でも質の上でも更なる意識変革が可

29　在日大韓基督教婦人会全国連合会編、『コゲ』第7集（一世のオモニの証言特集号）、1986年

能だろう。つまり、教団の共通の神学理解が打ち建てられなければならない。だが、教団のエキュメニカル性はそういう意味で弊害になっていると言えるかもしれない。

在日二世・三世世代から神学生が育たないために80年代後半以降激増する韓国からの移民にともない、韓国の教団から送られてくる牧師たちの数は増える一方で、彼らの神学的背景は全くと言ってよいほどばらばらである。教団が謳う多様性は信徒たちの背景の多様性であって、多様な聖書解釈と神学理解という多様性の内実になってしまっている。もちろん、聖書解釈は一人ひとりが違っていて当然であり、多様であるからこそ、多くの人々に意味をもたらしてきた。しかし、最低限度の基本的神学理解やKCCJの歴史的背景とその構成員の背景を理解し、その人々にとって解放（救い）につながるメッセージがなされるべきであるが、「在日の文化」や日本の文化などへの理解がないまま、護教的で、「福音派」的な内容の多様性になっている実態は単にアイロニーだということで済まされない深刻な問題にまでなっている[30]。

このような深刻な状況を現実として受けとめながら、また、牧師たちに影響されながらも牧師たちの神学理解や女性問題に対する意識を変える主体は女性たちであるように思う。だからこそ教団の未来は、彼女たちが在日としての経験と女性としての経験を言語化し、複眼的な視点に立って自らを解放する神学そして社会とつながる実践とプログラムがつくられるかどうかにかかっている。そのことをジェンダー意識の変革とともに女性解放運動の一歩として主体的に考えていくことが求められているように思う。

30　深刻な問題の一つとして、韓国からの教団派遣宣教師や元来のKCCJに移籍したのちも、本国の元来の教団との絆が強く、KCCJという教団に属した以上そこで一致していかなければならないのが、むしろ、それぞれの本国とのつながり（教）派閥をKCCJ内に作り分裂の火種をくすぶらせている。